

自閉症スペクトラム障害者のユーモア体験における意味性の評価

—意味性の評価がユーモア体験に与える影響と意味性の評価の理由回答—

永瀬 開*
田中 真理**
川住 隆一***

本稿では、自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder: ASD) 者のユーモア体験における意味性の評価について、ASD 者自身が行う意味性の評価がユーモア体験に与える影響、及び意味性の評価の理由に焦点をあてて検討を行った。その結果、以下の4点が示された。1) ASD 者は典型発達 (Typically Development: TD) 者に比べて意味性を強く評価しやすい。2) TD 者においては意味性を強いと評価した場合にユーモア体験が低減され、ASD 者においては、意味性を弱いと評価した場合にユーモア体験が低減される。3) 意味性を評価する理由として、ASD 者においては状況の道徳性に関連する理由が最も多く言及され、TD 者において登場人物の感情状態に関連する理由が最も多く言及された。4) 意味性を評価する理由として、ASD 者において刺激に自己を投影する言及が見られなかった。これらの結果の背景には、ASD 者が意味性を評価する際に、登場人物の感情情報に注目せずに道徳判断を行うこと、ユーモア刺激を認知する際に、自己を投影して捉えないことがあると考えられた。

キーワード：自閉症スペクトラム障害, ユーモア体験, 意味性の評価

問題と目的

1. 自閉症スペクトラム障害におけるユーモア体験

自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD) は、発達の遅れでは説明できない特異的な社会的相互作用と社会的コミュニケーションにおける持続的な障害及び、限局的・反復的な行動、興味もしくは活動のパターンを特徴とする、広汎で連続した臨床群である (DSM-5; APA, 2013)。これらの特徴を有する ASD 者は、特に青年期において、他者への関心が高まり、他者と親密な関係を築きたいという欲求が強くなることが指摘されているが (辻井, 2004)、青年期以降、年齢が高まるにつれて、対人関係において不適応を示すことも明らかになっている (Klin, Saulnier, Sparrow, Cicchetti, Volkmar, & Lord, 2007; van Steensel, Bögels, & Perrin, 2011; 伊勢・

*教育学研究科 博士課程後期

**九州大学基幹教育院 教授

***教育学研究科 教授

十一, 2014)。こうした中で, ASD 者の対人関係における不適応の要因として, 他者とユーモア体験を共有することの困難さが注目されている(三橋, 2010; Rosqvist, 2012)。ユーモア体験とは, 外界の刺激をきっかけとして生起する「おもしろい」や「おかしい」などの一過性の愉悅(Mirth)の情動体験であると定義される(伊藤, 2009; Nomura & Maruno, 2011)。そしてユーモア体験を他者と共有することには, 対人関係を良好にする効果があることが知られている(Fraley & Aron, 2004; Shiota, Campos, Keltner & Hertenstein, 2004)。そのため, ASD 者の対人関係を考える上で, 彼女らのユーモア体験という視点は重要であると考えられる。

ASD 者がユーモア体験を他者と共有することに困難さを抱える背景には, ASD 者と他者との間においてユーモア体験をする感覚的な刺激が異なることがあると考えられる(Lyons & Fitzgerald, 2004; Samson, 2013)。例えば, ASD 者のユーモア体験に関する臨床像について詳細な報告した Asperger (1944)は, 6歳の ASD 児が病院に来談した際に, 養育者などの他者が表出した冗談にユーモア体験をしない様子を報告している。このことは, 典型発達(Typically Development: 以下 TD)者がユーモア体験をするような冗談に ASD 者はユーモア体験をしないということを示している。その一方で, Weiss, Gschaidbauer, Smason, Steinbäcker, Fink, & Papousek (2013)は, ASD 者と TD 者を対象にユーモア体験をさせるアニメ動画を視聴させる実験を行ったところ, ASD 者は TD 者がユーモア体験をしていない場面でユーモア体験をしていたことを指摘している。これらの研究をふまえると, ASD 者がユーモア体験をする刺激が TD 者と異なることが考えられる。そのため, ASD 者におけるユーモア体験を共有することの困難さを理解するには, ASD 者と TD 者におけるユーモア体験の差異が, ユーモア体験が生じる際のどのような認知処理過程の違いから生じているのかについて明らかにすることが必要である。

2. ユーモア体験が生じる際の認知処理過程

ユーモア体験が生じる認知処理過程については, 1970年代から研究が蓄積され始め(Suls, 1972), 現在では以下の4つが指摘されている(野村・丸野, 2008; 伊藤, 2009; Nomura & Maruno, 2011, 伊藤, 2011)。すなわち, 1) 構造的不適合の評価, 2) 分かりやすさの認知, 3) 刺激の精緻化, 4) 意味性の評価¹, である (Fig. 1)。

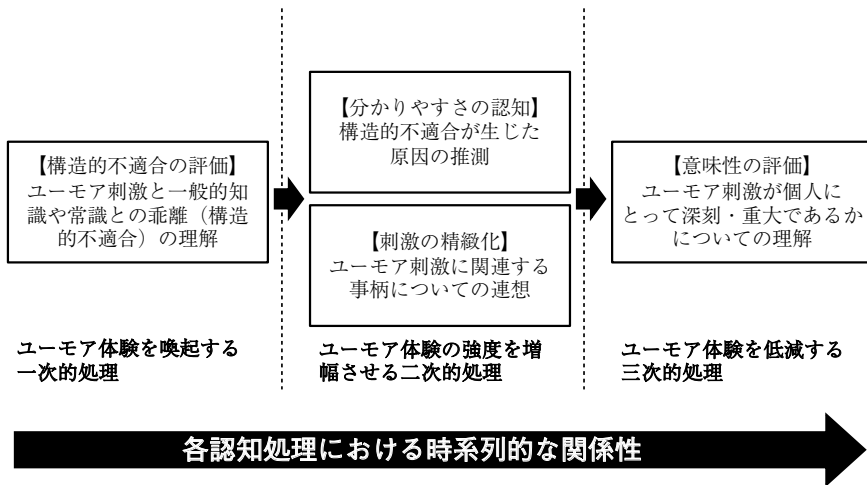


Fig.1 ユーモア体験における認知処理過程

まず1) 構造的不適合の評価とは、ユーモア刺激を構成する要素の組み合わせやパターンと、一般的知識や常識との乖離の理解だと定義され、ユーモア体験を喚起する一次的処理であると考えられている(伊藤, 2010; 永瀬・田中, 2012a)。例えば、国語の先生が漢字を間違えるという状況は、「国語の先生は漢字を間違えないだろう」という常識に乖離したもので、すなわち構造的な不適合であり、その構造的な不適合を理解することが構造的な不適合の評価である。この構造的な不適合の評価については、ASD 者も可能であるということが先行研究によって指摘されている(永瀬・田中, 2012a; Weiss et al., 2013)。

次に2) 分かりやすさの認知と3) 刺激の精緻化について説明する。これらの認知処理は構造的な不適合の評価によって喚起されたユーモア体験の強度を増幅する二次的処理である。まず分かりやすさの認知とは、ユーモア刺激における構造的な不適合が生じた原因が、どれほどわかりやすいかについて認知することだと定義される(伊藤, 2010)。分かりやすさの認知は、刺激における構造的な不適合が生じた原因につながる手がかりとなる情報(以下、手がかり情報)があることによって促進されることが知られており、構造的な不適合の原因が推測されやすいほど、強いユーモア体験がされることが明らかになっている(伊藤, 2010)。次に刺激の精緻化とは、ユーモア刺激となる状況の展開やユーモア状況に登場する人物の心情など、ユーモア刺激に関連した様々な連想を行うことである。この刺激の精緻化が行われるほど、強いユーモア体験がされるほどが明らかになっている(Nomura & Maruno, 2011)。

永瀬・田中(2013a; 2013b)はASD 者とTD 者を対象に、手がかり情報が分かりやすさの認知と刺激の精緻化に与える影響、及び分かりやすさの認知と刺激の精緻化がユーモア体験の強さに与える影響を検討した。その結果、手がかり情報がある刺激において、ASD 者はTD 者に比べて構造的な不適合の原因を推測することが困難であること、ASD 者において手がかり情報の有無が分かりやすさの認知と刺激の精緻化に影響を与えないこと、ASD 者において刺激の精緻化のみがユーモ

ア体験の強さに影響を与え、分かりやすさの認知がユーモア体験の強さに影響を与えないこと、の3点が明らかにされている(永瀬・田中, 2013a; 2013b)。

最後に4) 意味性の評価について説明する。意味性の評価とは、ユーモア体験をする個人が行う、ユーモア刺激が所属する社会集団にとって重要な意味、価値を持つかどうかに関する評価であると定義され(伊藤, 2009)、構造的不適合の評価、分かりやすさの認知、刺激の精緻化の後に行われる三次的処理であると考えられる。意味性の評価については、TD者を対象とした研究において、意味性が強く評価されることによって、ユーモア体験が低減される、すなわちユーモア体験が感じられなくなることが明らかにされている(伊藤, 2011)。しかしながら、ASD者自身がどのように意味性の評価を行うか検討した先行研究は全く行われていない。

ここまでユーモア体験における認知処理過程について、それぞれASD者がどのような特徴を示すかについて概観してきた。この結果、ASD者のユーモア体験における認知処理過程については、構造的不適合の評価、分かりやすさの認知、刺激の精緻化については先行研究が徐々に蓄積されているものの、意味性の評価については、先行研究の蓄積が皆無であるという点が問題であると考えられる。そのため、ASD者におけるユーモア体験の特徴を包括的に明らかにするためには、ASD者自身が行う意味性の評価がどのような特徴を示すのかについて検討する必要があると考えられる。

3. ASD者のユーモア体験における意味性の評価に関する仮説

先述したように、ASD者のユーモア体験における意味性の評価の特徴について扱った研究は皆無であるが、1つの事例がASD者のユーモア体験における意味性の評価について示唆を与えている。永瀬・田中(2012b)はASD者を対象に行ったグループワークの中で冗談をグループメンバーの前で発表するという活動を報告した。その活動中である青年期のASD者が、TD者のスタッフにとって意味性が強く評価される冗談を表出し、その冗談にユーモア体験をする事例が見られた。この事例をASD者における意味性の評価という点から考えると、ASD者の意味性の評価の特徴として、以下の2つの仮説が考えられる。まず1つめは、ASD者がTD者に比べて意味性を弱く評価するという仮説である。すなわち、ASD者においても意味性の評価がユーモア体験を低減させるが、TD者に比べて意味性を弱く評価するために、TD者がユーモア体験をしない刺激についてもASD者がユーモア体験をするということである。またこの際、ASD者が非社会的刺激(例えば家具や絵画等)に注目しやすいこと(Klin, Jones, Schultz, Volkmar, & Cohen, 2002)、他者の心的状態の理解に困難を抱えること(Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985)をふまえると、ASD者はTD者と異なる理由から意味性の評価を行い、特に他者が存在するユーモア刺激において、意味性を弱く評価すると考えられる。

次に2つめの仮説は、ASD者において意味性の評価がユーモア体験に影響を与えないという仮説である。すなわち、ASD者のユーモア体験に対して意味性の評価が影響を与えないことによって、TD者が意味性を強く評価するユーモア刺激においても、ASD者がユーモア体験をすると考えら

れる。しかしながら、これら2つの仮説についてこれまで実証はされていない。そこで本研究ではこれらを踏まえ、以下の3つの仮説を検討することを目的とする。

仮説1: ASD 者は TD 者に比べて意味性を弱く評価する。

仮説2: ASD 者と TD 者間において意味性の評価がユーモア体験に与える影響が異なる。

仮説3: ASD 者と TD 者において意味性の評価を行う理由が異なる。

方法

実験協力者

実験協力者は青年期の ASD 者8名, TD 者14名であった。対象者の年齢は ASD 者が17歳 - 23歳 (平均 CA : 19.25歳, $SD=1.98$, 平均 FIQ : 95.38, $SD=1.82$), TD 者が20歳 - 24歳 (平均 CA : 22.09歳, $SD=1.24$)であった。ASD 者は, 医療機関でそれぞれ, 自閉性障害, 特定不能の広汎性発達障害, アスペルガー障害の診断をされていた。対象者には本研究の趣旨を説明した後, 口頭と書面にて研究協力の同意を得た。18歳未満の実験協力者については, その保護者にも口頭にて研究協力の同意を得た。

ユーモア刺激

ユーモア刺激として, 評価する際に因果関係を含めた状況の全体的理解ではなく, 状況を構成する諸要素の位置関係など, 状況の部分的な要素の認知に基づいた理解が必要な「スキーマレベル」の構造的不適合が含まれる写真画像10枚を使用した (Table 1)。10枚の写真刺激の一例を Fig. 2に示す。スキーマレベルの構造的不適合が含まれる写真画像を用いた理由として, 永瀬・田中 (2012a) で示されているように, ASD 者においても確実にユーモア体験することが明らかになっている点が挙げられる。ユーモア刺激の内容については, ASD 者と TD 者それぞれにおいて多様な意味性の評価理由を尋ねることができるよう, 幅広い内容の刺激を選定した。刺激の選定においては, 先述したように ASD 者においては心の理論の障害 (Baron-Cohen et al, 1985) や, 他者の感情理解の特異性 (Tracy, Robins, Schriber, & Solomon, 2011) が指摘されているために, 刺激における登場人物の有無は重要であると考えられる。そのため Table 1において示す, 刺激1, 刺激3, 刺激5, 刺激7, 刺激9については人物が登場しない写真, 刺激2, 刺激4, 刺激6, 刺激8, 刺激10については人物が登場する写真を用いた。

Table 1 ユーモア刺激の内容

刺激1	お弁当箱の中央にご飯があり、その周囲一杯に梅干しが敷き詰められている写真
刺激2	ヘルメットをし、ライダーズーツを着ている男性が公園の遊具でバイクに乗るマネをする写真
刺激3	ベンチの足を出す側が壁に接して設置されている写真
刺激4	プールの中で男性2人が、テーブルをはさんでコーヒーを飲んでいる写真
刺激5	イクラと酢飯と海苔でつくられた軍艦の模型の写真
刺激6	乗馬をした女性がファーストフードのドライブスルーを通る写真
刺激7	サンダルのように鼻緒を付けられた2匹の魚の写真
刺激8	ダイビングをしている男性とサメがハイタッチしている写真
刺激9	公園でプランター代わりとしてトイレの便器に花が植えられている写真
刺激10	ダムの放水の前で男性が立ち、その水が男性から出ているように見せている写真



Fig.2 ユーモア刺激の具体例 (刺激1)

質問項目

ユーモア体験を捉える質問項目

実験協力者におけるユーモア体験の程度を測定するため、以下に示す4項目について、4件法(4-とても、3-まあまあ、2-あまり、1-ぜんぜん)で聴取した。具体的な質問項目は、“どのくらいおもしろかったですか(項目1)”“どのくらい笑えましたか(項目2)”“どのくらい印象に残りましたか(項目3)”“どのくらい引き込まれましたか(項目4)”の4項目である。

意味性の評価を捉える質問項目

実験協力者における意味性の評価の程度を測定するため以下に示す2項目について、4件法(4-とても、3-まあまあ、2-あまり、1-ぜんぜん)で聴取した。具体的な質問項目は、“この写真の状況に、あなたはどのくらい「重大さ」を感じましたか(項目5)”“この写真の状況に、あなたはどのくらい「深刻さ」を感じましたか(項目6)”の2項目である。また実験協力者における意味性の評価の理由回答を詳細に明らかにするために、意味性の評価理由について以下の質問から自由回答を聴取

する。具体的な質問項目は、“この写真の状況のどういうところが重大だ、あるいは重大ではないと感じましたか(項目7)”“この写真のどういうところが深刻だ、あるいは深刻ではないと感じましたか(項目8)”の2項目である。

実験手続き

実験は実験協力者ごとに大学の実験室において個別に実施された。実験協力者は実験室に入ると、始めに実験全体の流れに関する説明を受け、実験への参加に同意した。その後、実験協力者に対して、下記の各試行の流れに関する教示が行われた後、実験10試行が行われた。1試行の流れは以下の通りであった。始めに、スクリーン上にユーモア刺激が5秒程度表示された。その後、上述した質問項目が1問ずつ提示され、実験協力者はそれぞれの質問項目に対して口頭で回答した。刺激の提示については、Microsoft Office PowerPoint 2007を用いた。

分析手続き

ASD者とTD者のどちらが意味性を強く評価しやすいのかを検討するために、独立変数を障害の有無、従属変数をそれぞれの全ての刺激における意味性の評価の合計得点としてt検定を行った。またASD者とTD者のどちらがユーモア体験を強くするのかを明らかにするために、独立変数を障害の有無、従属変数を全ての刺激におけるユーモア体験の合計得点としてt検定を行った。また刺激ごとの意味性の評価の強さとユーモア体験について検討するために、独立変数を障害の有無、従属変数をそれぞれの刺激における意味性の評価の得点とユーモア体験の得点としてt検定を行った。

次にASD者とTD者のそれぞれにおいて、意味性の評価がユーモア体験の強さにどのような影響を与えているかを検討するために、一般化線形混合モデルを用いて分析を行った。混合モデルとは変数に固定効果(fixed effects)と変量効果(random effects)の両方を指定したモデルである。本研究では実験協力者及び、10種類の刺激を変量効果として指定することにより、実験協力者と刺激によって生じたデータ間の相関を可能な限り考慮した分析を行った。具体的にはTD者、ASD者それぞれにおいて、固定効果を検討する説明変数として意味性の評価の合計得点、目的変数としてユーモア体験の合計得点、変量効果として対象者と刺激の種類を含めたモデルを検討した。以上の分析にはSPSS Ver. 19.0を使用した。

またASD者とTD者それぞれにおける理由回答の特徴を明らかにするため、意味性の評価における理由回答についてASD者、TD者のデータごとに要約的内容分析(Mayring, 2000)を行った。具体的には、得られた意味性の評価における理由回答を要約し、それらをコードに分類した後、各コードについて言及数を算出した。要約的内容分析は、筆者と発達障害学を専攻している大学院生の2名で行った。

結果

1. ASD 者と TD 者における意味性の評価の比較

まず意味性の評価の強さが ASD 者と TD 者とで異なるかを明らかにするために t 検定を行ったところ、意味性の評価の合計得点において有意差が見られ、ASD 者の方が意味性の評価の得点が高かった ($t(20)=4.01, p<.05$)。次に、それぞれの刺激における ASD 者と TD 者の意味性の評価の強さを明らかにするために t 検定を行ったところ、刺激1, 刺激5, 刺激6, 刺激8, 刺激10において意味性の評価の強さに有意差が見られた (Fig. 3)。いずれの刺激においても ASD 者が TD 者に比べて意味性の評価の得点が高かった (刺激1 ($t(20)=3.46, p<.05$); 刺激5 ($t(20)=2.98, p<.05$); 刺激6 ($t(20)=2.28, p<.05$), 刺激8 ($t(20)=3.70, p<.05$); 刺激10 ($t(20)=2.80, p<.05$))。また刺激2, 刺激3, 刺激4, 刺激7, 刺激9においては意味性の評価の強さに有意差は見られなかった (刺激2 ($t(20)=1.42, n.s$); 刺激3 ($t(20)=0.77, n.s$), 刺激4 ($t(8.95)=1.55, n.s$), 刺激7 ($t(20)=0.45, n.s$), 刺激9 ($t(8.88)=1.26, n.s$))。続いて、ユーモア体験の強さがそれぞれの刺激において ASD 者と TD 者間で異なるかどうかを明らかにするために t 検定を行ったところ、ユーモア体験の合計得点について有意差は見られなかった ($t(20)=0.31, n.s$)。次に、それぞれの刺激における ASD 者と TD 者のユーモア体験を明らかにするために t 検定を行ったところ、全ての刺激において有意差は見られなかった (刺激1 ($t(20)=0.34, n.s$), 刺激2 ($t(20)=0.94, n.s$), 刺激3 ($t(20)=0.93, n.s$), 刺激4 ($t(20)=0.47, n.s$), 刺激5 ($t(20)=1.66, n.s$), 刺激6 ($t(20)=0.02, n.s$), 刺激7 ($t(20)=0.00, n.s$), 刺激8 ($t(20)=0.42, n.s$), 刺激9 ($t(20)=0.00, n.s$), 刺激10 ($t(20)=0.80, n.s$))。

次に ASD 者と TD 者における意味性の評価がユーモア体験に与える影響について明らかにするために、一般化線形混合モデルによる分析を行ったところ、ASD 者においては意味性の評価がユーモア体験に正の影響を与えるモデルが示され ($F(1, 78)=5.61, p<.05$)、TD 者においては意味性の評価がユーモア体験に負の影響を与えるモデルが示された ($F(1, 138)=4.34, p<.05$) (Fig. 4)。

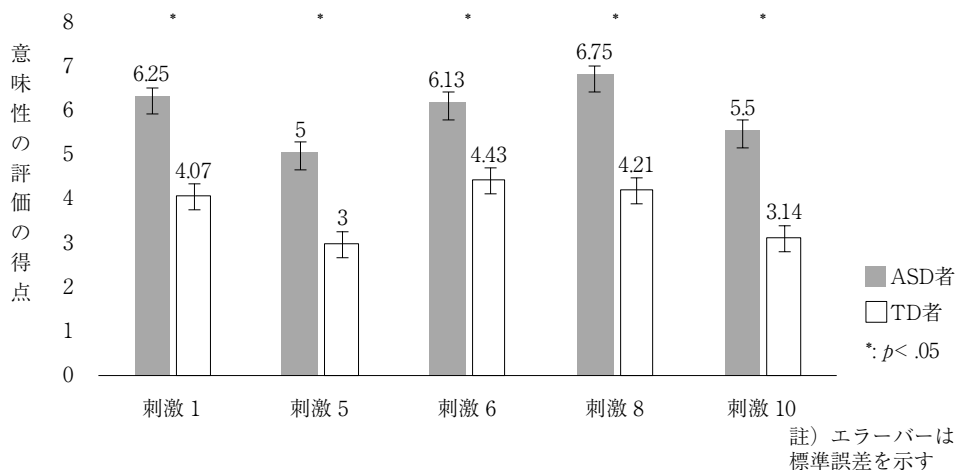


Fig.3 各刺激における意味性の評価

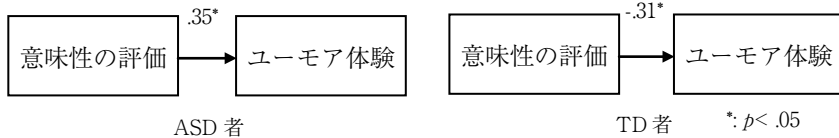


Fig.4 意味性の評価がユーモア体験に与える影響

2. ASD 者と TD 者における意味性の評価の理由回答

要約的内容分析を行った結果、ASD 者における総言及数は167であり、TD 者における総言及数は287であった。これらの言及をコード化したところ、9つのコードが見出された。これらのコードについて、ASD 者と TD 者のそれぞれにおいてどの程度の割合で言及されていたかを明らかにするために、各コードにおける言及の割合を算出した。その結果を Table 2 に示す。ASD 者においては、「状況の道徳性」が全体の48%で最も多く言及されていた一方、「自分がその状況にいた場合の感情」は言及されていなかった。また TD 者においては、「登場人物の感情」が全体の言及の25%で最も多く言及されていた一方で、「状況の起きた理由」が全体の1%で最も少なく言及されていた。以下各コードの定義について述べる。「状況の道徳性」とは、構造的不適合である状況の道徳性に関する言及であった。「状況の与える影響」とは、構造的不適合である状況がその場にいた登場人物や社会に与える物理的な影響に関する言及であった。「登場人物の行為意図」とは、構造的不適合である状況を引き起こした登場人物の行動に対する意図に関する言及であった。「状況そのもの」とは、状況そのものの状態に関する言及であった。「登場人物の感情」とは、構造的不適合である状況にいた、あるいはその状況を見た登場人物の感情状態に関する言及であった。「状況の起きた理由」とは、構造的不適合である状況が起きた理由に関する言及であった。「状況への感心」とは、構造的不適合である状況についての感心に関する言及であった。「自分がその状況にいた場合の感情」とは、構造的不適合である状況に自分がいると仮定した際の自身の感情状態に関する言及であった。

Table 2 意味性の評価の理由回答に見出されたコード

コード	ASD 者の言及数(割合)	TD 者の言及数(割合)
状況の道徳性	47(28%)	30(10%)
状況の与える影響	36(22%)	48(16%)
登場人物の行為意図	26(15%)	41(14%)
状況そのもの	25(15%)	54(19%)
特に何も感じなかった	16(10%)	15(5%)
登場人物の感情	7(4%)	72(25%)
状況の起きた理由	6(4%)	4(1%)
状況への感心	4(2%)	12(4%)
自分がその状況にいた場合の感情	0(0%)	11(4%)
総言及数	167	287

考察

本研究では、ASD 者のユーモア体験における意味性の評価の特徴について焦点を当て、ASD 者が意味性を強く評価しやすいかどうか、ASD 者において意味性の評価がユーモア体験に影響を与えるかどうか、ASD 者が意味性の評価を行う理由が異なるかについて、TD 者との比較から検討した。以下それぞれについて考察を行う。

1. ASD 者と TD 者における意味性の評価の比較

まず意味性の評価に関する t 検定の結果、ASD 者が TD 者に比べて意味性を強く評価することが明らかになった。また写真に他者が登場する刺激6, 刺激8, 刺激10においても ASD 者は TD 者に比べて意味性を高く評価した。この結果は、ASD 者が TD 者に比べて意味性を低く評価するという仮説とは異なるものであり、また写真における他者の有無が意味性の評価に影響を及ぼしていないことを示している。そして、ユーモア体験に関する t 検定の結果、全てのユーモア刺激において ASD 者と TD 者との間に違いは見られなかった。この結果は ASD 者において、意味性の評価がユーモア体験に与える影響が TD 者と異なることを示唆していることが考えられる。この点を踏まえ、ASD 者のユーモア体験について意味性の評価が与える影響について明らかにするために、一般化線形混合モデルによる分析を行った。分析の結果、ASD 者において意味性の評価がユーモア体験に正の影響を与えること、すなわち ASD 者は意味性を強く評価するほど、ユーモア体験が強くなるということが明らかになった。この結果は、ASD 者が意味性を弱く評価するとユーモア体験が低減されるということを示しており、意味性の評価がユーモア体験に負の影響を与える、すなわち意味性が強く評価されるとユーモア体験が低減されるという TD 者の特徴とは異なるものであった。この結果をふまえると、ASD 者が TD 者と比べて意味性を強く評価したユーモア刺激において、ユーモア体験に差が見られなかったこと背景には、意味性の評価がユーモア体験に与える影響が ASD 者と TD 者と異なるためであると結論付けることができる。またこの結果は、ASD 者におけるユーモア体験を他者と共有することが困難であるという状態像について一つの示唆を与える。すなわち、TD 者が重大、深刻であると捉えユーモア体験をしない状況に対して、ASD 者はユーモア体験をするということである。このような経験が蓄積することによって、前述した ASD 者における孤立感が増すことが考えられる (三橋, 2010)。しかしながら、このような ASD 者と TD 者間における意味性の評価がユーモア体験に与える影響の違いがどのような理由から生じるのかについてはこの結果からは明らかになっていない。そこで、ASD 者と TD 者間における意味性の評価がユーモア体験に与える影響の違いが生じる理由について意味性の評価に関する理由回答から考察を行う。

2. ASD 者における意味性の評価の理由回答

要約的内容分析によるコード化及び各コードにおける言及数の割合を算出した結果、ASD 者と TD 者における意味性の評価理由の差異として以下の2点の特徴が見られた。まず1点目として、

ASD 者と TD 者とでは意味性を評価する際に重視する理由が異なるという点である。各コードにおける言及数の割合をみると、ASD 者においては「状況の道徳性」のコードが全体の言及数の28%の割合で最も多く言及され、TD 者に比べても多い割合で言及されていた。また TD 者においては「登場人物の感情」のコードが全体の言及数の25%の割合で最も多く言及され、ASD 者に比べても多く言及されていた。このことは、ASD 者が意味性を評価する際に、TD 者に比べて状況の道徳性に注目する一方で、登場人物の情動体験に注目しない傾向を有していることを示唆している。ASD 者が意味性を評価する際に状況の道徳性に注目しやすく、登場人物の情動体験に注目しないという結果の背景には、ASD 者における他者の感情情報の重要性が低いことと(神尾・十一, 1998), 状況の道徳性を判断する際の特異性(Hiervelä & Helkama, 2011)があると考えられる。神尾・十一(1998)は、青年期の ASD 者を対象に行った実験の結果、ASD 者は表情の示す感情情報に対する重要性が低いために、表情のラベリングが困難であることを明らかにした。この結果は、ASD 者が日常生活において、他者の感情情報を重要視しないことを示している。また、Hiervelä & Helkama (2011)は、ASD 者と TD 者を対象に、共感する能力と道徳判断の能力との関連を検討したところ、TD 者において他者の感情を理解する等の共感する能力と道徳判断の能力との間に関連が見られたのに対して、ASD 者においてこの能力間に関連は見出されなかった。この結果は、ASD 者が道徳判断をする際に他者に対する共感を行わないことを示している。これらの結果をふまえると、ASD 者は感情情報に対する重要性が低いため、ユーモア刺激を認知する際に他者の感情理解を行わないまま道徳判断をすることが考えられる。そのため、こうした背景から、ASD 者は意味性の評価をする際に「状況の道徳性」が注目され、「登場人物の感情」が注目されなかったと考えられる。

次に2点目として、ASD 者が意味性の評価する際に自己投影を行わない点である。本研究では TD 者において見出された「自分がその状況にいた場合の感情」のコードが、ASD 者において見出されなかった。このことは、ASD 者が意味性を評価する際にユーモア刺激となる状況に対して自己を投影して捉えないことを示唆している。ASD 者が意味性を評価する際に自己を投影しない背景には、ASD 者における自己意識の低さ(十一・神尾, 2001)があると考えられる。十一・神尾(2001)は、青年期 ASD 者を対象に行った自己意識に関する検討を行った結果、ASD 者は TD 者に比べて、事物を記憶、理解する際に自己の体験を想起する意識が希薄であることを明らかにした。この結果をふまえると、ASD 者はユーモア刺激を理解する際に自己を想起する意識が希薄であるため、意味性の評価をする際にユーモア刺激となる状況に自己投影を行わなかったということが考えられる。しかしながら、このコードは TD 者においても全体の言及数の4%程度しか言及されていないため、今後この可能性については慎重に検討する必要があるだろう。

続いてこれらの ASD 者と TD 者における意味性の評価理由の差異と、ASD 者と TD 者間における意味性の評価がユーモア体験に与える影響の違いとの関連について考察する。これまで TD 者において意味性の評価がユーモア体験を低減する背景には、意味性の評価によってユーモア体験以外の他の情動体験が生起するためであると指摘されている(伊藤, 2009)。このことを踏まえると、

ASD 者と TD 者の間で違いが見られたカテゴリーである「登場人物の感情」「自分がその状況にいた場合の感情」は他の情動体験の生起と深く関係すると考えられる。これまでの TD 者を対象とした先行研究や論考では、他者の情動体験を認知すること（登張, 2005）やある状況に自己投影をすること（Batson, 2011）は自身の情動体験も引き起こすことが知られている。これらの知見をふまえると、ASD 者はこうした理由から意味性の評価を行わないため、他の情動体験が喚起されず、意味性を強く評価することによってユーモア体験が低減されない可能性が考えられる。しかしながら、ASD 者において最も言及された「状況の道徳性」が、他の情動体験を生起させるかについては、本研究で十分に検討できていないため、この点を検討することが今後の課題の1つである。

3. 本研究の意義と今後の課題

本研究の目的は、ASD 者のユーモア体験における意味性の評価の特徴を TD 者との比較検討から明らかにすることであった。最後に本研究の意義と今後の課題について述べる。

本研究では、ASD 者のユーモア体験における意味性の評価について、意味性を強く評価しやすいこと、意味性を弱いと評価するほどユーモア体験が低減されること、意味性を評価する際に他者の情動体験に注目せず、ユーモア刺激に対して自己投影を行わないことの3点が明らかになった。本研究の意義としては以下の2点が挙げられる。第1の意義は、前述したように本研究の結果が ASD 者における他者とユーモア体験を共有する際の困難さを説明できる点が挙げられる。すなわち、TD 者が意味性を強く評価し、ユーモア体験が低減される状況においても、ASD 者のユーモア体験が低減されないためユーモア体験を共有することが困難だと考えられる。また逆に TD 者が意味性を弱く評価し、ユーモア体験が低減されない状況において、ASD 者のユーモア体験が低減されるため、ユーモア体験を他者と共有することが困難になることも考えられる。これまで ASD 者におけるユーモア体験を他者と共有することの困難さの背景としては、分かりやすさの認知と刺激の精緻化という視点からのみ検討されているが（永瀬・田中, 2013a; 2013b）、本研究において明らかにされた意味性の評価における特異性は、ASD 者におけるユーモア体験を他者と共有することの困難さについて新たな視点を提示したと考えられる。

次に第2の意義として ASD 者の対人関係支援に対して視点を提示することが挙げられる。先述したようにユーモア体験を他者と共有することに困難さを抱えることによって、ASD 者は単に他者と親密な関係を築くことができなくなるだけでなく（Fralely & Aron, 2004）、他者との関係が悪化することも考えられるため（Kowalski, 2000）、ASD 者のユーモア体験の共有に対して支援を行う必要がある。本研究で明らかにされた知見は、ユーモア体験の共有に関する支援について以下の視点を提示する。例えば、意味性を強く評価しやすいユーモア刺激に対して、ASD 者がユーモア体験をし、TD 者がユーモア体験をしない場面において、ASD 者に対して「周りの人は深刻だなと思うと面白い」等、周囲の人がユーモア体験をしていない事実とその理由を意味性の評価という視点から伝えるといった支援が考えられる。またこの意味性の評価について伝える際には、「状況の道徳性」や「状況の与える影響」といった ASD 者にとって注目しやすい理由と合わせて伝える

と、ASD者にとって理解しやすいと考えられる。こうした支援によって、他者とユーモア体験を共有すること困難さを抱えることについてASD者自身が気づきを得ることにつながると考えられる。しかしながら、ASD者のユーモア体験の共有について扱った研究はほとんど見られないため(永瀬・田中, 2013c), ASD者のユーモア体験及びユーモア体験の共有に関する実践を蓄積していく必要があるだろう。

最後に本研究における課題について述べる。本研究では、ASD者のユーモア体験において、意味性が弱く評価される場合にユーモア体験が低減されるという特異性の背景としてASD者における他者の感情情報に対する注目の希薄なまま行う道徳判断、自己投影の不十分さによって、ユーモア以外の他の情動体験が生じないためという可能性を示した。しかしながら、前述したように本研究においてユーモア体験が多く生じなかった実験協力者が他の情動体験を生じていたかどうかについては検討できていない。そのため、ASD者のユーモア体験における意味性の評価と他の情動体験との関連について、日本語版PANAS (Positive and Negative Affect Schedule) (佐藤・安田, 2001)等の指標を用いて検討することが今後の課題であると考えられる。

【付記】

本研究をまとめるにあたり、研究にご協力いただきました皆様に深く御礼申し上げます。また分析に際して、ご尽力いただきました菅原愛理さんに深く感謝申し上げます。なお本研究は科学研究費補助金(基盤研究B / 課題番号23330270 / 研究代表者: 田中真理)の助成を受けた。

【脚注】

- 1 ユーモア刺激に対して個人や個人が所属する社会集団にとって重要な意味、価値を持つという評価を行うことを、伊藤(2009)の論文では、「無意味性の評価」とされているが、本稿では「意味性の評価」とする。

【引用文献】

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders, fifth edition*. Washington, DC: American Psychiatric Association.
- Baron-Cohen, S. Leslie, A.M. and Frith, U. (1985). Does the autistic child have a "theory of mind"? *Cognition*, 21, 37-46.
- Batson, C.D. (2011). *Altruism in humans*. Oxford. 菊池章夫・二宮克美(訳). *利他性の人間学*. 新陽社.
- Fraley, B. and Aron, A. (2004). The effect a shared humorous experience on closeness in initial encounters. *Personal Relationship*, 11, 61-78.
- Hiervälä, S. and Helkama, K. (2011). Empathy, value, morality and Asperger's syndrome. *Scandinavian Journal of Psychology*, 52, 560-572.
- 伊藤大幸. (2009). 感情現象としてのユーモア生起過程. *心理学評論*, 52, 469-487.
- 伊藤大幸. (2010). ユーモアの生起過程における論理的不適合および構造的不適合の役割. *認知科学*, 17, 2, 297-312.

- 伊藤大幸. (2011). 構造的・論理的不適合および無意味性がユーモアの生起に与える影響. *第75回日本心理学会 ポスター発表*, 2EV-059.
- 伊勢由佳利・十一元三. (2014). 自閉症スペクトラム障害およびその傾向をもつ成人における不安を中心とした心身状態とストレスに関する研究. *児童青年精神医学とその近接領域*, 55, 173-188.
- 神尾陽子・十一元三. (1998). 高機能自閉症における感情理解の過程に関する研究. *児童青年精神医学とその近接領域*, 39, 340-351.
- Klin, A., Saulnier, C.A., Sparrow, S.S., Cicchetti, D.V., Volkmar, F.R., & Lord, C. (2007). Social and communication abilities and disabilities in higher functioning individuals with autism spectrum disorders: The Vineland and the ADOS. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 37, 748-759.
- Klin, A., Jones, A., Schultz, R., Volkmar, F. and Cohen, D. (2002). Visual Fixation Patterns During Viewing of naturalistic Social Situations as Predictors of Social Competence in Individuals With Autism. *Archives General Psychiatry*, 59, 809-816.
- Kowalski, R. M. (2000). "I was Only Kidding!": Victims and Perperators' Perceptions of Teasing. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 231-241.
- Lyons, V. and Fitzgerald, M. (2004). Humor in autism and Asperger syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 34, 521-531.
- Mayring, P. (2000). Qualitative Content Analysis. *Forum: Qualitative social research*, 1.
- 三橋真人. (2010). アスペルガー症候群の人のユーモア理解のしづらさについて. *笑い学研究*, 17, 108-114.
- 永瀬 開・田中真理. (2012a). 自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア特性の解明—構造的不適合の評価に焦点を当てて—. *第50回日本特殊教育学会 ポスター発表*, P1-J-1.
- 永瀬 開・田中真理. (2012b). ある自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア表出の特徴—ユーモア表出時の他者理解の様子から—. *教育ネットワークセンター年報*, 12, 79-87.
- 永瀬 開・田中真理. (2013a). 自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア体験時の認知処理—言語的の手がかりの影響に注目して—. *第51回日本特殊教育学会 ポスター発表*, P4-G-2.
- 永瀬 開・田中真理. (2013b). 自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア体験モデル—刺激の分かりやすさの認知と刺激の精緻化が与える影響—. *第77回日本心理学会 ポスター発表*, 3AM-054.
- 永瀬 開・田中真理. (2013c). ある自閉症スペクトラム障害者における他者とのユーモア共有—心理劇的ロールプレイングにおけるユーモア表出を促す指示的・受容のかかわり—. *教育ネットワークセンター年報*, 13, 51-60.
- 野村亮太・丸野俊一. (2008). ユーモア生成理論の展望—動的理解精緻化理論の提案—. *心理学評論*, 51, 4, 500-523.
- Nomura, R. & Maruno, S. (2011). Constructing a coactivation model for explaining humor elicitation. *Psychology*, 2, 477-485.
- Rosqvist, H.B. (2012). The politics of joking: narratives of humour and joking among adults with Asperger syndrome. *Disability and Society*, 27, 235-247.
- Samson, A.C. (2013). Humor (lessness) elucidated – Sense of humor in individuals with autism spectrum disorders: Review and Introduction. *Humor: Interenational Journal of Humor Research*, 26, 393-409.
- 佐藤 徳・安田朝子. (2001). 日本語版 PANAS の作成. *性格心理学研究*, 9, 138-139.
- Shiota, M.N., Campos, B., Keltner, D. and Hertenstein, M.J. (2004). Positive emotion and regulation of interpersonal relationships. In P. Philippot and R.S. Feldman (Eds.), *The regulation of emotion* (pp127-155.) Mahwah, NJ:

Lawrence Erlbaum Associates.

Suls, J.M. (1972). Two-stage model for the appreciation of jokes and cartoons: Information-processing analysis. In J. H. Goldstein & P. E. McGhee (Eds.), *The psychology of humor*. San Diego, CA: Academic Press.

登張真稲. (2005). 共感喚起過程と感情的結果, 特性共感の関係一性の類似度, 心理的重なりの効果一. *パーソナリティ研究*, **13**, 143-155.

十一元三・神尾陽子. (2001). 自閉症者の自己意識に関する研究. *児童青年精神医学とその近接領域*, **42**, 1-9.

Tracy, J.L., Robins, R.W., Schriber, R.A., & Solomon, M. (2011). Is emotion recognition impaired in individuals with autism spectrum disorders? *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **41**, 102-109.

辻井正次. (2004). 広汎性発達障害のこどもたち—高機能自閉症・アスペルガー症候群を—for the sake of—. ブレーン出版.

van Steensel, F.J.A., Bögels, S.M., & Perrin, S. (2011). Anxiety disorders in children and adolescents with autistic spectrum disorders: A meta-analysis. *Clinical child and family psychology review*, **14**, 302-317.

Weiss, E.M., Gschaidbauer, B.C., Smason, A.C., Steinbacher, K., Fink, A., & Papousek, I. (2013). From Ice Age to Madagascar: Appreciation of slapstick humor in children with Asperger's syndrome. *Humor: International Journal of Humor Research*, **26**, 423-440.

Seriousness in Humor in Individuals with Autism Spectrum Disorder: The Effect of Seriousness Evaluation and the Reason of Seriousness

Kai NAGASE

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Mari TANAKA

(Professor, Faculty of Arts and Science, Kyushu University)

Ryuichi KAWASUMI

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

This study investigated the characteristic of humor in individuals with autism spectrum disorder (ASD), focusing on seriousness evaluation and the reasons behind the evaluations. Seriousness evaluation is considered to decline the degree of humorous experience. In the present study, 8 individuals with ASD and 14 typically developing (TD) controls were rated on the humor variable and seriousness variable using humor stimulus. In addition, they provided reasons for their seriousness evaluations. The results were as follows: (a) individuals with ASD rated higher on the seriousness variable than TD controls; (b) seriousness evaluation by individuals with ASD affected the experience of humor positively, on the other hand, seriousness evaluation by TD controls affected the experience of humor negatively; and (c) individuals with ASD did not focus on the emotional state of characters in the stimulus and refer to themselves.

Key words : Autism spectrum disorder, Humor, Seriousness evaluation